



Title	福松藤助「浪華日記行」後註
Author(s)	
Citation	語文. 1954, 11, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68451
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

福松藤助「浪華日記行」後註

(語頭の数字は複刻本文の頁と行数とを示す)
(片仮名書きは訓みの註である)

- 一の二 安永九年母——安永九年に九年母を掛けてゐる。九年母は筑後久留米藩の産物。
- 一の四 日田——豊後国(大分県)日田市。
- 一の五 大行司——筑後国(福岡県)朝倉郡の部落名。
- 一の五 玉来——同前。
- 一の五 析れと——析れど。
- 一の六 梅と——クヤメど。
- 一の八 一口号——ヒトクチズサミ。
- 一の二〇 琉琉手——甘藷の方言。
- 一の二 転枕——ウタタマクラ。
- 一の二 揖直る——ネデナオる。
- 一の三 外面かまし——ソトモがまし。
- 一の三 篠目——シノノメ。東雲の義。
- 一の二 雨も晴れは——雨もハルれば。
- 一の二 小石原——福岡県朝倉郡にある部落名。
- 一の二 柴峠——福岡県朝倉郡と田川郡との郡界にある芝峠。ここから豊前の国となる。
- 二の三 労果——ツカレハテ。
- 二の三 そのだ——福岡県田川郡添田町。
- 二の九 見るがひたるいの——見ユるがひたるいの。つるし杜若——つるし柿を掛詞とする。
- 二の九 菖蒲——アヤメ。
- 二の二 手説——テヨミ。碁の縁語。
- 二の二 香春——田川郡香春町。
- 二の二 採銅所——同郡採銅所村。
- 二の三 小倉室町——小倉市室町。
- 二の五 俳祖——松尾芭蕉。
- 二の六 実不易——実ニ不易。
- 三の三 鑾シ——モテナシ。
- 三の四 おくれし物——おくれし物。
- 三の七 元山——山口県小野田市本山。本山岬にある。
- 三の七 室津——山口県熊毛半島築端の港。
- 三の六 道法——ミチノリ。道程。
- 四の一 みたらる——広島県大崎下島の御手洗町。
- 四の六 楫柄——楫ノ柄。

取付し櫓もなく——取り付きしかともなく。櫓と甲斐とを掛けてゐる。

四の九 上妻坂東寺——カミツマバンドウジ。上妻は藤助の生国筑後上妻郡福島町。(今は八女郡に属す。)

四の五 牛窓——岡山県牛窓港。

四の四 水田天満御神——福岡県八女郡水田村天満宮。ミヅタ

五の四 アマミツオホソカミ。

五の三 見やる当にて——見やるアタリにて。当は辺の宛字。

五の七 顔が出す——顔が出ず。

五の九 過こし——過ぎ来し。

法——程(ノリ)の宛字。

五の十一 大阪の川口——安治川口。

中島——大阪市中の島。

五の十四 廿年来——宝曆九年より安永九年まで満二十年。

仙場——船場の宛字。

五の十五 豊竹二代の駒太夫——二代目豊竹駒太夫。初代駒太夫の子。明和三年八月北堀江市の側、豊竹座(番附口上)によれば曾根崎新地芝居かの「扇子合名月座舖」に初出座。初名豊竹生駒太夫。安永六年父の死により二代目を襲名。其後江戸にも下る。歿年月未詳。浄瑠璃換評判閣の磔(天明元年刊)や「増補浄瑠璃大系図」には、父に劣らぬ美声で、親に生さうつしの語り方であったと記されてゐる。宝曆八年藤助が大阪在住の際に、郷里の方の宗門帳に載るためこの二代目駒太夫藤右衛門

を介添へとして同道西下してゐる。

六の十六 仕贖——シニセ。老舖。

六の五 摺小木——摺粉本。

六の六 在付かね——在リ付きかね。

六の九 馴染の二階——宝曆九年(藤助二十七才)駒太夫宅に同居。舟の勞——舟のツカレ。

六の三 竹本染太夫——初代竹本染太夫。摂津西成郡伝法村の人。もと木綿商。伝法屋源七といふ。二代目竹本政太夫の弟子。宝曆四年十月、竹本座の「小野道風青柳観」が初舞台。伝法屋風を襲す。天明五年四月十一日歿。享年未詳。「只なんくせなくおとなしき語り口(中略)ふし付もちとこまかな様なれど無理なく只さら／＼と語らるるあんばい、いやはや外にいらい人はござりませぬ」(闇の磔)

六の三 矢太夫——この日記の本文には「豊竹駒太夫同矢太夫」とあり、これによれば豊竹矢太夫の意になるが、実は初代竹本弥太夫を指すものと思はれる。弥太夫は大阪曾根崎新地の人。通称紙屋義右衛門。有規堂千賀太夫の門に入って竹本千代太夫と言ったが、後に豊竹岡太夫(初代)の弟子となり、豊竹磯太夫と称した。宝曆十三年四月、「天竺徳兵衛郷鏡」にて竹本座に初出座。明和六年十二月竹本座再興の時、「近江源氏先陣館」に竹本弥太夫として出勤。文政三年正月清住軒と号し、同年五月十日歿。享年未詳。「紙屋節とて今に残れる

なり」(増補浄瑠璃大系図)

六の二四

言ふるる——イヒふるる。

七の一

釈の豊駒——初代豊竹駒太夫。通称播磨屋跡三郎。大阪

島の内炭屋町の人。竹本彦太夫(後の大和太夫)につ

いたが、その歿後は豊竹新太夫に入門、後に豊竹越前

少豫の弟子となり、享保二十年八月豊竹座の「刈萱桑

門鏡紫轅」に初出座。寛保及び寛延年間に江戸肥前座

に下る。帰阪後は引続き豊竹座に出動。安永六年歿。

享年未詳。「調子は上へはどこまでもつつぬけにて又

裏声を遣ふ事の名人にて実日本にての名音といふは

此人なり。よって今にも駒太夫節として一流を残され

り」(増補浄瑠璃大系図)

七の二

中村阿契——延享頃から安永にかけての豊竹座系の浄瑠

璃作者。宝暦十一年の「曾根崎模様」や「人丸萬歳台」

では福松藤助と合作してゐる。

七の三

浅田一鳥——浄瑠璃作者。森野長三郎といひ京都堺町に

住み、はじめ謡の師匠、後に浄るり作者となる。豊竹

座に聘せられて寛保から明和まで豊竹座の作者となる。

西沢一風の門下と言はれるが、生歿年月日未詳。(戯曲

小説通志其他による)

黒藏主——浪岡鯨児の別号。黒藏子、初名並木鯨児。並

木宗輔門下の浄るり作者。宝暦から明和にかけての豊

竹座の作者。

松洛——難波三藏。浄瑠璃作者。「近世邦楽年表義太夫

節之部」によれば、寛延二年十一月の「物ぐさ太郎」

から宝暦七年三月の「前九年奥州合戦」に至るまでの

豊竹座の合作者として、その名を連ねてゐる。

未対面——未ダ対面。

七の四

豊竹島太夫——二代目島太夫。島の内周防町に住し通称

平右衛門といふ。初め播磨少豫の門人となり、竹本志

摩太夫といひ、元文四年四月竹本座の「ひらがな盛衰

記」が初舞台。延享二年二月「軍法富士見西行」の時、

島太夫と改名。播磨少豫歿後は此太夫に随ったが、寛

延元年八月の「忠臣蔵」事件で此太夫と共に竹本座を

退座。豊竹座に転じて豊竹島太夫と名乗り、寛延三年

八月二代目豊竹若太夫となる。明和三年正月「本朝廿

四孝」の時、竹本座に転じ、竹本島太夫となり、更に

同六年八月の「殿造千丈嶽」より豊竹座に転じ、豊竹

島太夫となるが、天明元年以後多病となり、天明四年

九月十日歿。享年未詳。(闇の磔・増補浄瑠璃大系図等

による)

七の六

趣向山崎与次兵衛にて新作一部——天明元年(安永九年

の翌年)藤助に山崎与次兵衛比と云ふ作物語の述作が

ある。

七の八

豊竹比太夫——二代目。豊竹筑前少豫門弟。初名豊竹八

重太夫(初代)、寛延二年十一月豊竹座の「物ぐさ太郎」

が初舞台。宝暦元年十二月「一谷嫩軍記」の時、豊竹

時太夫と改名。宝暦七年「清和源氏十五段」の時、豊

竹此太夫となる。明和元年江戸に下り、同三年秋帰阪して北堀江市の側に操座を起し座本となる。寛政八年

歿、年七十一。名手にして作曲をもよくした。「全体

世話事にかけては此人。其外いつぞやの合邦辻などは、いらい人はないぞ。古物でも蝶々ハツ目極彩色天王寺村などけしからぬ出来、又平などはかくべつなもの、

吃の工合は此人につぐものはござりませぬ」(闇の礫)

岩田町——大阪の町名。長堀より南へ四筋目の堅通り、

東横堀より七丁あまり西寄り。

ハの二

鍛冶屋町——堺筋より一つ東の南北の通り。東横堀より三筋目。北浜から長堀までの間をいふ。

ハの三

中村富——初代中村富十郎。歌舞伎役者。俳名慶子。別号琴嶺舎。家号天王寺屋。享保四年に生れ、初代芳沢あやめ三男。初代中村新五郎の養子となる。養父と共に江戸に下り、享保十六年春、市村座で子役として初舞台。同年冬、京都へ上り女方として出演、以後宝暦

期に於ける代表的女方となる。殊に女武道事を得意とした。天明六年八月三日歿。享年六十八。「いかにしても女めいてよし、殊に打上りたる奥様、又手入らず

の娘風、腰元、傾城、武道事、所作は申すもおろか、何一つ不足のない、お上手」(役者花唄)

ハの四

中山文——初代中山文七。歌舞伎役者。俳名由男。家号和泉屋。松屋来助の子で、初代中村新九郎の養子となる。寛延元年、中山文七となり、実事を得意とした。

文化十年歿、享年八十二。(大辞典)

セの二

行平磯馴松——元文三年正月竹本座初演。作者文耕堂、三好松洛。

セの六

遊戯るる——アソビタハるる。

ハの一

堀江の芝居市の側——堀江市の側に操座があった。北堀江座。

ハの二

稻荷街道墨染桜——安永九年九月北堀江座初演。作者は菅専助、豊春助、豊竹忠律。

ハの三

八重太——二代目豊竹八重太夫。通称和泉屋平兵衛。大阪北の新天地の人。席貸業を営む。二代目豊竹此太夫門弟。宝暦十二年閏四月、豊竹座の「岸姫松戀鑑」に豊竹八蘇太夫と名乗って初舞台。明和二年二代目八重太

夫となる。安永八年江戸に下り、同九年帰阪。天明元年又江戸に下り同三年帰阪。上方・江戸共に好評を得たが、寛政五年十月歿した。享年五十。「うれい場は口にあわねど、梅川は出来ました。其外チャリ場にかけてはきつもの、いつぞや融大臣二の切などは出来

ました。いつでもかういふかたり口がよぶござる」(闇の礫)

ハの五

お染久松歌祭文——安永九年九月竹本座上場。作者近松半二。

ハのハ

難波橋——今のなにわ橋。

ハの二

美敷——ウツクシキ。

ハの二 つまり合て——つばり合せて。

への三 北皮屋町——北革屋町。大阪の東部、京橋より南へ四筋

目の堅筋、谷町筋より西の方をいふ。

への六 旧国大和屋宗次——俳人大伴大江丸のこと。飛脚間屋で

あった。

負しと——負ケジと。

九の二 近松半二——浄るり作者。穂積以貫の子。俗称以助、大

阪の人。竹田出雲の弟子。宝暦元年十月竹本座初演の

「役行者大峯松」の作者連名に名を連ねたのが最初で、

以後約三十年余の間、竹本座系の作者として活躍、晩

年山科に幽居したといはれる。特に舞台技巧にすぐれ

てゐたので有名、そのバラレリズムの技法が注目に値

する。天明三年二月四日歿。享年五十九。

九の四 恥けらし——ハヂけらし。

九の八 竹本政太——三代目竹本政太夫。通称播磨屋利兵衛。大

阪の人。塩町筋元勘四郎町に住んでゐたので「塩町の

政太夫」と言はれた。二代目政太夫の弟子。初名を中

太夫(二代目)と言ひ、宝暦六年二月竹本座の「崇徳院

讃岐伝記」の五段目に初出座。明和三年江戸に下り政

太夫を名乗らうとしたが紛糾を生じ明和四年帰阪、同

年十二月竹本座の「三日太平記」に竹本政太夫と改名

して出演した。「闇の磔」によれば、安永九年秋より

しばらく京都に行き、在阪中も上洛後も人気のよかつ

たことがわかる。寛政四年十一月播磨大掾を名乗つた

が再び政太夫に帰り文化六年(?)名跡を門弟氏太夫に

譲り、翌年五月共に江戸に下る。竹本播磨太夫と名乗

つて葦屋町の芝居に出勤したが、文化八年七月十四日

江戸にて歿。享年八十。

京物語——安永五年藤助四十四才にして忠臣京物語とい

ふ作物語を書き国君に献ず。

北の新天地——曾根崎新地をいふ。

鎌置——チリバメオキ。

千歳萩——藤助四十一才安永二年国君の内命により奥州

千歳萩といふ作物語を作りて献ず。

新清水——大阪天王寺附近にあり。

起たり——起キたり。

炭善——炭屋善兵衛の略称。

待かねし——待チかねし。

聞せん——聞カせん。

僻——癖の宛字。

乞ず——乞ハず。

なんばの京平——十月二十五日の条にいふ所のなんば新

地京や平次郎。

一河流に——一河ノ流レに。

調へたり——シラベたり。

言なくり——イヒナグりて。

高津黒焼屋——高津(カウヅ)の鳥居前にある黒焼薬屋。

正確にいへば大阪市南区瓦屋町五番地。高津神社の西

側、松屋町筋への間にある。古来二軒が並んで元祖争

ひをしてきたが、昭和の戦災で、そのうちの天満屋といふのが滅び、今は「丸キ屋、島谷市兵衛店」だけが残っている。

二の五

応律——豊竹応律。大阪の浄瑠璃並に歌舞伎脚本作者。

若太夫芝居主。初名野田文六、野田甚六、豊竹甚六。

並木宗輔、野田甚文に師事。元文初頃から歌舞伎作者を勤め、宝暦元年豊竹座の作者に転じ、晩年には歌舞伎作者を兼ねた。天明五・六年頃歿。(大辞典)

羽林公——久留米藩主従四位少将有馬頼億。

三の一

菜飯田楽——生玉の名物、安永六年の浪花名物富貴地座

三の二

位にも「田楽は生玉を専とし」とある。

三の六

坂町——なんば新地坂町。

三味重次郎——初代鶴沢重次郎。「増補浄瑠璃大系図」

には「元祖父治郎門弟にして延享の頃なり。東座の立者也。此人淳朴なる三味線にて長らく勤められし門弟も数多有共不詳略之」とあるが、延享期の浄瑠璃評判記類には全く出てゐない。宝暦明和期の評判記にはすべて評判されてゐるが、安永期のものには再び現れなくなる。「近世邦楽年表」では寛延三年頃から明和七年頃までの豊竹座系にその名が見えてゐる。従つて寛

延から明和にかけて活躍したもので、この「浪華日記」の頃には既に芝居には全く出座してゐなかつたと思はれる。ただ「三極志」(明和三年梅見月刊)には江戸肥

前座に出演の評として「上上吉、七字にたへなるだ

い

もく銭」と書かれてゐる。明和二年八月豊竹座退転の

後、江戸に下つたものであらう。但し同三年八月には

大阪で出演してゐる。

室つ——兵庫県の室津ならん。

生宝西照庵——紅葉の名所として知られ、また料理に有

名であつた。

岡野源一七才子——浄瑠璃作者。「近世邦楽年表」によ

れば、宝暦六年三月豊竹座初演の「義仲勤功記」から

宝暦十一年九月同座初演の「人丸萬歳合」までの期間、

豊竹座の合作者としてその名が見える。殊に「人丸萬

三の七

三の二

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

三の三

二年十二月四日より東の芝居にて十帖源氏、物草太郎の時、初出座し、それより東の座にて長らく勤め明和三年より堀江市の側此太夫座で立者となる。後の事不詳。二代目名八は、初の名理造、天明寛政の頃盛んに勤める、事実不詳。(以上「増補浄るり大系図」の説)。「評判寛宿梅」(天明元年刊)では、江戸外記座に於ける名八の評に大上吉とあり、「闇の磔」には「駒丈とは御親父からの合方ゆへか」といひ又「近比はどの芝居へもしみじみとお勤めなく残念。承れば駒丈同道にて江戸へお下りとの事」と述べてゐる。これから考へると、この日記にいふ名八は初代名八だと考へられる。

二三の九 稲荷——博労町稲荷。

拝めくりて——拝めくりて。

二三の二 中の顔見世——道頓堀中座の十一月顔見世興行。

三の二 モヲよかる年の陽——「もふく」よかる丑御執達」安永九年十一月五日より上場。

三の三 山下金作——二代目山下金作。歌舞伎役者。俳名里虹。家号天王寺屋。初め中村富十郎門下の半太夫から寛延

二年初代の養子となり、二代目相続。女方の名手。寛政十一年歿。年六十七(大辞典)

一四の九 和泉式部の芝居——京都寺町誠心院の境内に在り。

一四の二 市太郎——初代鶴沢市太郎。「初代友治郎門弟にて生国伊勢の産なる盲人也。大阪に來りて三絃の修行を致す。

明和二年酉九月十二日より西の芝居にて姫袖鏡、此時より出座致し突に疍の早き盲人なる事……(増補浄瑠璃大系図)但し、既に宝暦十二年閏四月豊竹座の「岸姫松轡鏡」に出てゐて、浪華日記の「一別以來二十年」といふ市太郎の言葉と大体一致する。「岸姫松」の作者の中に福松藤助も加はってゐるのである。

一四の五 詣しに——詣デしに。

一四の二 お真向様——オマムキサマ。

一五の二 鑑の渡——安永八年(慶應四十七才)日田の元締め清島藤右衛門の所望により武蔵国鑑渡と云ふ作物語を述作して同氏へ進呈した。

一五の三 しつはく台——しつぽく台。

一六の四 養んと——養ハんと。

一六の二 庄兵衛——浄るり太夫。伝不詳。

一七の二 向顔——マガホ。

一七の七 文蔵——鶴沢文蔵。染太夫一座の三味線弾き。

一七の六 しやかたら文——じやがたらフミ。

一八の三 順風テ——オヒテ。

一九の七 鯨川——アジガハ。安治川。

二〇の三 赤石——明石。原本はじめ明石と書き、のち明の字を見え消ちにして赤と訂正する。

二〇の六 塩野の木屋——シホヤのコヤ。塩屋の小屋の宛字。このあたり在原行平の歌を引歌とする。

二〇の七 詠物——ナガメモノ。

まぎり舟——間切り、すなはち波間を切つて舟を進める意に、まぎり舟、(すなはち龍骨ある和船を引きかけたのである。

三〇の三 下津井——岡山県児島半島西の突端にある港。

三〇の三 せみのどふ——所在不詳。

三〇の五 はなぐりの瀬戸——花栗の瀬戸。伊予国伯方(ハカタ)島の西岸と大三島との間。潮流の烈しきを以て有名。

三〇の三 上の関——カミの関。山口県熊毛郡望津の対岸、長島。

三〇の四 水押——ミオシ。和船の船首の波切り木。

三〇の二 終日ス——ヒネモス。

三〇の二 淋敷サ——サミシサ

三〇の六 日田の旦那——日田の元締清島藤右衛門。

三〇の二 上の原——今、八幡市のうち。小倉市の山手の街道を今の八幡市に出で、黒崎から上の原を経て木屋瀬に出たのである。

三〇の二 木屋の瀬——コヤのセ。福岡県鞍手郡木屋瀬町。筑前国

三〇の二 のうち。直方、飯塚方面に出る遠賀川筋である。

三〇の二 飯塚——今の飯塚市。

三〇の二 刷ひ——カヒツクロひ。

三〇の二 我俳諧に身をこらし——福松藤助は、十四才にして桃江

三〇の二 庵秋虎に入門し、四十一才の時雪中庵蓼太の門に入る。當時は紫雪庵官蘭と号す。

三〇の二 思惟——シュイ。

三〇の二 宰府——太宰府天満宮。

三〇の二

三〇の二

三〇の二

三〇の二 乞へきに乞——乞フべきに乞フ。

三〇の二 ひや水峠——福岡県嘉穂郡内野村から筑紫郡山家村への

三〇の二 郡界にある峠。

三〇の三 山家——ヤマヘ。筑紫郡の村名。

三〇の三 松崎——福岡県三井郡立石村松崎。

三〇の三 府中——今の久留米市。

三〇の三 忠見村——筑後国山門郡忠見村。藤助の妻の実家のある

三〇の三 所。当時妻子と共にこの地に住む。

三〇の三 ある大人——本文にある日田の清島藤右衛門と推定せら

三〇の三 れる。「大人」の上を闕字としてゐる。敬意を表する

三〇の三 ためである。本文中の「清島氏」のところも闕字にし

三〇の三 てある。この紀行文で、闕字の箇所はこのほか「久留

三〇の三 米藩侯」のところにも一個所あるのみ。

三〇の三 以上。

三〇の三 附記

三〇の三 この後註のうち芸名に関する部分は、すべて大阪学芸

三〇の三 大学横山正助教授の手を煩はした。厚く謝意を表する。

三〇の三 小島

三〇の三

三〇の三

三〇の三

三〇の三

三〇の三